

# 森とエゾシカと人の 幸せな共生を目指して



井田 宏之 (いだ ひろゆき)  
社団法人エゾシカ協会事務局長

1954年札幌生まれ。東京農業大学畜産学科卒業。エゾシカ有効活用検討委員会(北海道)委員(2005年~07年)。09年野生鳥獣被害防止マニュアル作成委員会(農林水産省)委員。10年捕獲鳥獣食肉利用促進協議会・10~12年利活用技術指導者育成事業検討委員会(農林水産省)委員。スローフード・フレンズ北海道サプリーダー。

近年、北海道内では、エゾシカの増加が著しく、その生息域は全道に拡大し、平成22年度の推定生息頭数は約65万頭に達し、農林業被害等との軋轢が顕著となっている。筆者は20年前にシカ防除用牧柵設置に関与して以来、エゾシカ猟区、エゾシカ協会など、エゾシカ問題に取り組んできた。こうした経験を踏まえて今後の付き合い方の提案をしたい。

最初にエゾシカと人との歴史と現状に触れたい。エゾシカはニホンジカの亜種で、その仲間は国内6亜種、中国等に8亜種が生息している。DNA解析によればニホンジカの祖先は30万年前に中国大陸に出現したと推定されている。日本列島へは、南ルート(17万年前)と北ルート(6万年前)でヒトとともに渡ってきた。その後、我が国で農耕が始まった時(弥生時代)からヒトと野生動物との戦い(農業被害)は始まり、営々と現代まで続いている。

しかし、北海道は本州と事情が異なり、大規模な農地開拓は明治以降であり、それまでは縄文時代、続縄文時代、擦文時代についてアイヌ民族と、エゾシカ等野生動物との関係は一種の共生関係が続いていた。明治政府は、北海道開拓の資金を得るためにエゾシカを大量捕獲(6年間で57万頭、年平均9.5万頭)して輸出した。この乱獲と記録的な豪雪により、明治のはじめにエゾシカは絶滅寸前にまで減少した。すなわち、北海道開発はこのエゾシカのいない時代に始まり、大正・昭和時代を通じて平成のはじめまで続いたといえるだろう。エゾシカによる農林業被害は昭和50年頃から増え始め、平成8年には50億円を突破した。その後、行政による各種対策の結果、減少に転じたが、平成17年から再び増加し、平成22年度には60億円に達しようとしている。

### 北海道の取り組み

北海道は、平成10年以降「道東地域エゾシカ保護管理計画」及び「エゾシカ保護管理計画」に基づき、エゾシカの個体数管理等の取り組みを行ってきた。エゾシカは北海道固有の自然資源であることから、個体数調整を進める一方で、捕獲個体を有効に活用していくことも重要であり、北海道では平成18年に「エゾシカ

有効活用ガイドライン」「エゾシカ衛生処理マニュアル」を作成し、食肉としての利用を促進している。また、平成22年度から捕獲対策の強化を進めている。平成22年度には約11万頭が捕獲されたが、生息数の増加に歯止めをかけるには年間15万頭の捕獲が必要とされている。

こうした対策は、しかしながら決定的な効果を上げるに至らず今日に至っている。そこで、平成24年3月には「エゾシカ保護管理計画（第4期）」が策定された。計画策定の目的は、「新たな捕獲のしくみと資源としての捕獲個体の有効活用を併せて推進し、個体数削減に必要な捕獲数を確保することで、人間活動との軋轢を軽減し、絶滅を回避しながら適正な保護管理を行い、エゾシカと人間の共生及び本道の豊かな生物多様性の保全を図る」というものである。すなわち、以前にも増して個体数調整の徹底と資源の有効利用の活性化がうたわれる内容となっている。

### 食肉利用

エゾシカ肉を食用として販売する目的で処理するためには、「食品衛生法」に基づく食肉処理業の許可を有する施設で行わなければならない。実際、エゾシカの推定生息頭数65万頭は肉牛飼育頭数（約54万頭）よりも多く、輸入穀物・化石エネルギーに依存せず、年間10万頭以上を生産（捕獲）していることになる。言い方を変えれば輸入穀物と化石エネルギー非依存でフードマイレージゼロの肉資源があることになる。平成22年度においては処理実績がある処理場は61カ所あり、総処理頭数は約1.4万頭（肉量：300t）、捕獲数11万頭に対して12%にとどまっている。

### 社団法人エゾシカ協会の取り組み

エゾシカと人間が将来にわたって良好な共生関係を保ち続けるにはどうしたらいいのだろうか——。エゾシカ協会は、新しい共生策のお手本をヨーロッパに求めて、保護管理・被害防止・有効活用の効果的な組み合わせによる（森とエゾシカと人の幸せな共生）を実現すべく発足した。平成9年に行われたヨーロッパ調査の成果を元に、その参加者を中心として平成11年にエゾシカ協会

は設立され、翌年、社団法人認可を受けた。その活動の一つの成果として、平成23年に『エゾシカは森の幸』（近藤誠司監修、大泰司紀之＋平田剛士著）を発行することができた。その内容がエゾシカ協会の理念をよく表しているため、ここに一部抜粋紹介する。（132p～133p）

シカを持続可能な自然資源として活用する仕組みを工夫すれば「害」をゼロに、さらには「益」に変えることができるかも知れません。「シカを食べること」が「シカを捕る動機」となり、かつ「捕りすぎない動機」となるような社会システムを、私たち人間の側が構築さえすればいいのです。シカを適切な密度に維持することは、森林生態系を守り、種の多様性を維持することにも直結します。「食べることは、守ること」なのです。

現状ではエゾシカは北海道にとってマイナス資源であるが、マイナスをプラスにするためには資源化が必要であり、資源化のヒントは『エゾシカは森の幸』にあるのでぜひお読みいただきたい。

### 関係機関の取り組みと今後

「森とエゾシカと人の幸せな共生関係」は行政だけでなく、道民（消費者）がシカを知り、食べる・使う（皮・角）ことが必要と考える。

北海道は、毎月第4（シ）火（カ）曜日を「シカの日」として飲食店、販売店でエゾシカ肉普及啓発活動を展開、釧路では、FMくしろが毎週「エゾシカ・ゼミナール」を放送し、また「釧路シカ会」がシカを資源に転換させたいという理念で活動している（獣医畜産新報2012・6月号参照）。札幌では安心・安全なエゾシカ料理普及促進協議会が活動して、AAO通信「安心（A）安全（A）美味しくてヘルシー（O）」を発行している。明治時代の開拓は自然資源の収奪型であったが、これからの新たな北海道開拓は、サステイナブルなエゾシカを含む自然資源活用をメニューの一つとして考えたかどうかと思う。今後、こうした「産官学」＋「消費者」が連携・共同して能動的に行動することによって、幸せな共生関係が実現できるかもしれないと期待しているところである。

### HP・出版物等の紹介

- ・北海道環境生活部エゾシカ対策室  
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/est/index.htm>
- ・社団法人エゾシカ協会 <http://www.yezodeer.com/>
- ・獣医畜産新報「ニホンジカの食資源化における衛生の現状と将来展望」2012年6月